

鍋蓋

〔浪花街廻噂〕^三萬松先生大坂の鍋には皆なつるが無といひヤスがさやうでありやすかへ、鶴人つるはムリやせん、大坂では中から上の暮しでは、竈の数の五ツ六ツも有ヤスから、釜は釜、鍋は鍋と竈へ掛きりにして置いて、煮物があれば空處へかけて煮やすから、別に鍋や釜をはづして、其處へ掛るには及やせん、それゆゑつるは無とも、間に合といふ處よりして、昔からつるなしと見えヤス、

〔和爾雅〕^五飲食炊煮具、鍋蓋^{ナベフタ}

〔書言字考節用集〕^七器財、鍋蓋^{ナベフタ}本草

〔物類稱呼〕^四器用、鍋なべ^略中なべのふたを、房州にてかざしといふ、

〔好色二代男〕^三一言聞く身の行衛

鼻が赤前垂は夕日にうつろひ、^略中 出て戻りに茶碗火入を提げて、鍋の蓋を明けて見たり、買物の帳を付けたり、一人して萬事の埒をあくる、

〔赤穂義士隨筆〕^二同[○]大高 鍋蓋の銘

ある人古き鍋蓋に、大高子葉が銘あるを藏す、鹿島山人の題詩あり、詳にその顛末を云す、

鼎蓋銘併序

人有贈古鼎蓋一枚者、道是北條家治世之時所用物也、古赤穂侯臣大高名忠雄、字子葉得之爲珍、自銘其蓋曰、何時一樽酒、一人不喰君與我、予讀之慨然不已、夫物因人貴、此物雖卑、經歷已久、經子葉手事亦奇矣、且子葉四十七士之一、忠勇義烈、孰可不稱賢乎、此物不朽、愈益知子葉之賢、爲之作之、

東海一男子、放蕩東海濱、非無懷沙思、不見鼓世人、咄嗟五斗米、蕭條漉酒巾、江城有知己、鼎蓋憐我貧、經歷知幾載、温古復爲新、止鼎惟有蓋、叔世不沈淪、悠悠鎌倉時、何容愛爲珍、蓋面鐫十字、髣髴如見眞、